

# 馬

の数はあっているのに、人の犠牲者数があわない……。今ではどうして考えられないことですが、方城大非常ではそうでした。

三菱方城炭鉱が発表した大非常の犠牲者は671人（男性540人・女性131人）。うち4人が決死隊員で、2人は救出後の死亡としています。亡くなった入坑者は667人。三菱炭業社史には当時の入坑者が688人と記されているので、21人が助かったこととなります。

しかし、当時の新聞記事や資料では死者数が655人から8百人までと、まちまち。一方、犠牲となった石炭運搬用の馬の数は、ほぼ11頭（一部は当初6頭と発表）で一致していました。

## 消えている納屋

「新聞掲載のない複数の納屋の存在」

当時は「納屋制度」といって、炭鉱が坑夫を直接雇用するのではなく、炭鉱と契約する各納屋が、坑夫を坑内へと送り出していました。

大正3年12月15日の事故後、各納屋が17日・19日・20日と3回にわたって入坑者名簿を事務所へ提出します。その数は「福岡日日新聞」に掲載されましたが、3回とも人数はバラバラでした。しかも4百人ほどの坑夫を抱えていたという内海納屋をはじめ、山下、田尻、荒川などの納屋の人数があげられていませんでした。

## 千人以上の可能性

「招魂碑を手がかりに算出すると……」

かつて方城炭鉱の守り神とされた「山の神社跡」には方城大非常の犠牲者をまつた「招魂碑」があります。事故の翌年に三菱方城炭鉱が建立した碑です。その裏には671人の犠牲者を出したという碑文の後に「坑一坑役夫約三千人と刻まれています。

また、三菱炭業社史には「大正4年5月から一部採炭を開始し、労務者数も2千841人となり、大正5年の出炭量は22万3千トンで、災害前の水準に復帰した」と書かれています。ちなみに大非常前月の大正3年11月は2万2千トンの月産量でした。大正5年の平均月産量は約1万8千6百トン。出炭の能率面から見ても3千人ほどの坑夫がいたと十分に考えられます。

当時の坑内労働は一番方と二番方の、

### インタビュー

田川市石炭歴史博物館館長

安藤 龍生さん



千人以上の犠牲者が出た可能性は十分にあると思います。各納屋は入坑者数を把握できていないようですし、未報告の納屋もあるようです。いずれにしても方城大非常の犠牲者数は、発表された671人であっても、2位以下を大きく引き離す日本最大の炭鉱災害です。

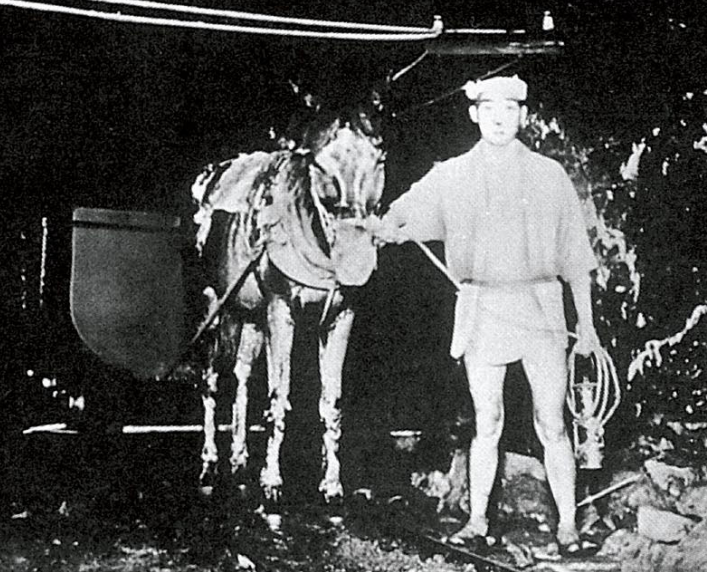


山の神社跡にある招魂碑。大正4年11月に建立された。表の碑文は、永平寺（福井県）の観光玄照住職が揮毫した。裏には「役夫約三千人と刻まれている。



# 馬は十一頭、人は一頭、

いったい何人が命を落としたのか。当時の「うわさ」は本当だったのか。



当時、石炭運搬などで活躍した馬は、貴重な労働力だった。大非常の復旧作業では、筑豊一円の炭鉱から馬が無償で提供されたという。写真 / 田川市石炭歴史博物館



採掘現場は炭を掘る先山と運搬する後山に分けて、後山は主に女性が担当した。昭和8年から女性と16歳未満の入坑が禁止された。写真 / 田川市石炭歴史博物館

### 「方城炭坑罹災死者霊鑑」にない名前 松永義男の墓



父の名と死亡原因が刻まれている松永義男の墓。

我部堂の東側にある墓地には、大非常犠牲者の墓が数多くあります。その中にある松永義男の墓。彼は6百人以上の坑夫をかかえた大納屋・松永石のあととり息子でした。墓石には大正3年12月15日の命日に続いて「策郎長男 瓦斯爆発 変死 松永義男 十八才」と刻まれています。裕福な納屋頭の名門と息子の死因を記した納屋頭である父・松永策郎の無念さうかがえます。犠牲者で「霊鑑」に記載のない人が多数存在していますが、そこには松永義男の名も記されていません。

2交代制（一部を除き12時間労働）。一番方の方が10対8の割合で二番方より多かったといえます。しかもこの日は「給料日」で翌日の16日は月に2回ある「公休日」でした。もうすぐ年末で正月をひかえた12月です。そのような状況を考えて、いつも以上の人数が坑内にいたことは、だれもが想像するところでしょう。

参考までに算出すると、坑夫3千人、一番方が少なめにみて1千6百人。坑内に入らない坑外夫がこの3千人に含まれていたとしても、およそ、この炭鉱も坑内夫8割、坑外夫2割の割合ですから、坑内夫は約1千280人。仕事を休む人がいても大非常当日に坑内にいた人数は「千人を超えていた」と想定することができます。

三菱方城炭鉱発表の大非常で助かった入坑者は、わずか21人でした。当時「千人以上が死んでいる」とささやかれた方城村のうわさも、まったく根拠のない話ではなかったのです。